

毎朝、おはよう！おはよう州
サッカーのゴン中山です！俺ゴン州
風邪をひいたよ、ハックション！白州

秋の夕日に♪ 照る山 紅葉♪
いやまだ日光のひとつ手前の今市でした。これ又、失礼しました。

エーサ！エーサ！エッサ！ホイ！サッサ！おさるの籠屋だ！
ホイ！サッサ！ 小田原チョウチンで一す！

白州の広々とした空 / 川のせせらぎ / 山の色合い…
そんな白州郷牧場を秋山校長に紹介され、おじゃますることになったのは深まる秋の、今頃の季節でした。
山のふもとにある古民家での、炉辺での語らい…
竹の炭火作り… 桜の木の皮を削ってのTシャツの染色…
キノコ作り… 取れた綿を糸車でつむぐ… 鶏さばき…
こんな体験は今までになかった！ホンマかいな？ソウかいな？の連続！

これはひとつ、自分も与えられるばかりでなく、何か一緒に参加したくなり、今に至っています。
不思議な魅力のある白州の自然の中で、これからも感動や驚きを見出していきたいと願っている私です。

編集後記

小学生のときから白州に通っている「きららの学校」高校生スタッフ、山田汐里さんの撮影した白州横手の写真が、今年の埼玉県高校写真展で最優秀賞に選ばれました。（さらに再受賞の連絡もありました！）白州郷牧場のブログにも写真が転載されていますので、どうぞご覧ください。

さて、写真といえば、子供たちをカメラで撮影するときに、わたしはどことない後ろめたさを感じることがあります。マスメディアのように一方的に「みる」ことはひとつの暴力であるということの他に、違う理由もあるようだと考えました。

写真は撮影者にとっての「そうあるべき」イメージを投影してしまうものです。たとえばわたしたちは誰に命じられなくても、京都に行けば神社仏閣や趣きある町並みを古都の情緒を込めて撮影します。無意識のうちにカメラで京都をわかりやすく「京都化」しようとしてしまうわけです。

そして、子供の写真を撮るときには、無害な「子供らしい」笑顔を選んでシャッターを押し、大人からみて扱いやすいような形に子供を「子供化」してしまいます。わたしの感じる後ろめたさとはそんな自分の視点を、レンズの向こうから子供たちに逆に見透かされているような感覚から来ているのでしょうか。

本を読んでみよう！
「サンタクロースって
いるんでしょうか？」
中村 妙子
東 逸子 翻訳
偕成社



12 月に入ると待ち遠しいのがクリスマスです。今年は街のイルミネーションも待ちきれないように早々と輝いていますね。

『サンタクロースは本当にいるのでしょうか？』そんな疑問に答えた本があります。100 年ほど前、実際にあったお話です。

8 歳の少女の率直な質問に、アメリカニューヨーク・サン誌がとても味わい深いお返事を社説に載せました。

…サンタクロースを信じない人は今流行の「うたぐりや根性」がしみこんでいるのでしょうか。この果てしない宇宙の中では人間などちっぽけなもので、私達の知恵でははかり知れないものが沢山あります。試しに探偵を雇ってニューヨーク中の煙突を見張って見たらどうでしょうか…

さあ、サンタクロースは本当にいるのでしょうか？大人も子供も難しい問題を抱えている昨今ですが、愛にあふれるクリスマスを子供たちと、かつて子供だった大人の方へ贈ります。

秋山 知子

撮影者がどんな眼差しで対象をとらえているかをカメラは画面の中に同時に写し込むからです。みることによってみられてしまう、写すことによって写されてしまうという逆説が写真にはあります。

写真は、カメラという厳格な機械で、現実世界を正確に相似に写しとる技術である一方、人の意識や無意識までも投影してしまう奇妙な表現です。科学的客観的な原理がかえって主観的に対象を語ってしまうという倒錯性を持ち、一瞬を永遠のように、幻影を事実のようにみせかけ、ただひとりしか存在しない人間を無数に複製してばらまく、騙しや矛盾に満ちたメディアです。

しかし、紙の表面に描かれた、対象を指し示す記号に過ぎない写真に、わたしたちはそれがわかっていながら、激しく心を動かされてもしまいます。虚構に過ぎない写真はときに現実以上の存在に逆転します。

ネガフィルムの反転した光と影が象徴するように、写真は逆説と矛盾のかたまりです。それでも、というか、だから、高校生スタッフの山田汐里さんは写真に惹かれ、写真を撮り続けているのかもしれませんが。 井上 忠彦



ある教育者の言と教育基本法改正

「わが国の現実社会をよくよく考えてみると、政治、宗教、教育、文学、実業などあらゆる社会を通じて、沈滞腐敗の極点に達し、政治家に常操なく、宗教家に徳行なく、教育家には定見がなく、文学者および実業家には理性と根気とがない、そうでなくてさえ貧富の懸隔はなはだしく、富者は富に驕り、貧者は貧に苦しみ、世の中で人の守るべき道も危機に瀕しており、人の心もすさんでいる。」

この文章は、現在の社会についてそのまま通じる内容であるが、実は私が勤務する学校の創立者・江原素六（1842～1922 年）が今から 103 年前に書いたものである。江原は貧しい御家人の家に生まれ、幕府学問所の昌平校、講武所で学び、幕兵として官軍と戦い銃弾 3 発を足に受けて敗退。沼津に移り沼津兵学校を創立。その後、自由民権運動と出会い衆議院議員・貴族院議員も勤めたが、それ以上に我が校を基盤にして教育者として活動した。彼はこうも言う。「愛というものは教育学や教授法ではいけないのです。愛は己の心からでるのであります。すなわち教育学や教授法は正義に属するもので、愛の部には属さないのであります。」

安倍政権は「教育基本法」の「改正」を行った。現憲法の平和条項の骨抜きを目指す憲法「改正」の露払いをさせるためだ。賛成・反対の中心問題の一つが「" 愛 " 国心」問題であるが、憲法改正案条文にある「伝統と文化を尊重し、それをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が、そのまま教育基本法改正案第 2 条（教育の目標）になっていることから明らかであろう。

江原は 1902 年発表の政友会「教育方針大綱」の起草者だが、その第一に「教育の方針は保守排外思想を排したものでなければならない。国民として己の国家を尊重するのは言うまでもなきことながら、ただ固陋の考えから己を尊び他を卑しみ、外人といえこれを輕蔑するようなことは、自尊ではなく自傲である」と掲げた。同年、彼は「教育勅語といえども万代不易にあらず時世とともに変化すべし」と演説し選挙で落選。幕末維新の動乱時代に貧困の中で学問を希求し、戊辰戦争で生死の境を経験し、そして後年のキリスト教信仰（39 歳で洗礼）が江原の反官権的姿勢を生み出した。

明治初めから日本国家が戦争と侵略と植民地支配を行ってきた結果の敗戦を真っ向から受け止めようとしない歴史観に根ざした憲法「改正」、そして学力低下・いじめ・風紀の乱れは「教育基本法が時世にあわなくなっているからだ」と強弁しての基本法「改正」は、江原の「万代不易にあらず…変化すべし」という洞察と教育への真の信頼からほど遠い妄言・牽強付会である。江原は言う。

「国家の進歩とは個人の進歩にはかならない。歴史の歩みは急激であり、事態は急転している。どこをみても激しい競争があり、誰もが競争相手である。青年にも多事多難な課題が待ちかまえている。青年たるものこのことを覚悟しておくべきである。」

個人の進歩のために国家が奉仕するのではなく、国家（富者・権力者）の進歩のために個人を奉仕させる流れへと急転していこうとしている。青年もわれわれも覚悟をして生き続けなくてはなるまい。

秋山 真兄

秋の学校以降の白州と牧場の主な出来事を簡単にお伝えします。

気候は日本全国同様でしょうけれど白州も暖冬です。

「旧暦と暮らす」(ビジネス社)の3部作を読みながら、旧暦の勉強を続けています。研修センターには2種類の旧暦が張り出され「今日は旧の何日、月の形は・・・」と言った日々です。旧の正月は今年は新暦の2月18日ですからまだ新年ではないのですが、今年は「何の花の蕾が膨らみ始めたな」など、もっと自然の動きを緻密に観察しながら、旧暦の実際を学び農や生活に応用できるようにしてゆきたいと考えています。



さて、昨年の11月17・18日には石川県加賀市で恒例のBMW技術全国大会が開かれました。16回目となりましたが日本全国とタイ・韓国・フィリピンの農業者や自然と関わりながら持続する社会や生活を作りたいと実践する人々が300人近く参集しました。「BMの原点・地域の土と水の再生を」をテーマとした研究報告や活動報告がなされましたが、キララの講師である奥地さんが「日本列島の形成と北陸地方の岩石と水」というテーマで講演を行いました。キララの子も達はこの数年の学校で折に触れ「日本列島の成り立ちと白州の岩石と水」という講義を聴いたりフィールドワークしてきたのですが、今回の講演でも子どもたちが受けた同じ驚きと知的感動を多くの大人たちが感じ、地域の土と水を再生しようと試みる実践にとって学問的動機の発見となったようです。白州からは総勢7名が参加しました。

アメリカ旅行記

11月22日から29日まで見田と高草木は、アメリカのオハイオ州ハイラムという田舎の村に3日間、ニューヨークで3日間の旅をしてきました。好く言えば「見聞を広める」旅だったものですから、あの911のグランドゼロ・ウォール街・メトロポリタン美術館・チャイナタウン・自由の女神・ブロードウェイ・・・、そして広くて大きいアメリカの田舎と、列挙すれば「観光コース」となりました。意外だったのはどこも子どもが沢山いたこと、しかも日本より子ども達が都市の環境に順応しているように見えたこと。ニューヨークではシングルマザーが急激に増えているのだそうです。



新しいひよこたち

続々と鶏の雛が来ています。暫く途絶えていた雛の育成を昨年一月から開始し一年が経ちます。農場の若い人たちの研修対象となったりキララの子も達が生話しながら触れ合っています。小さな頃から活発に運動し、餌場から水場へそして寝床へと走り回り、発酵飼料と良い水で育つ雛は、そうでは無い鶏に比べ基礎体力が全く違ってきます。人間の子もも同じだと思っています。



3年間白州の農場で働きながら学んできた新谷知大君が旅に出ます。畑の土壌検査・施肥設計・播種・収穫など一通りのカリキュラムをこなし終え、自立へと向かいます。キララの冬の学校に参加した後タイで和郷園(千葉県)のマンゴー栽培と輸出事業に付いて研修し、まずはカナダで仕事をしながら世界を見てこようというのが彼の計画です。新しい知見、知識、技能を身に付け、新しい人の生き方を切り開いていってくれることを楽しみに願っています。

ということで、遅れている次号は、新年の冬の学校報告となります。



BMW 大会

2006・11・17-18



2006年「きらら夏の学校」での奥地さんの講義

「きらら春の学校」が開催されます！

日程は、2007年3月30日(金)～4月3日(火)です。

恒例の「野草採り+野草料理」「餅つき(草餅)」「野菜の定植」や、新しいプログラムが行われる予定です。

詳細はこちらをご覧ください。<http://www.hakusyu.jp/kilala/>

